

地域貢献活動として小学生フットサル大会を実施！

経営情報学部 4年 長谷川 太・1年 野島 涼太・1年 戸塚 龍士・1年 竹野 彪雅

多摩大学にフットサル部ができたのは、2012年5月ですから、5年ほど前のことです。全国トップレベルの活躍を続けていることはご存知の通りです。

フットサルは、比較的新しいスポーツで、キーパーを含めて1チーム5人で戦うインドアのサッカーのような競技です。サッカーと比べると、コートが狭く人数も少ないので、攻守の切り替えの回数が非常に多く、また一人の選手がボールを扱う回数もサッカーよりも多くなるため、スペインやブラジルなどでは、子ども時代に積極的にフットサルを経験することが推奨されていて、とても盛んです。多摩大学には、フットサルに適したアリーナがあり、大学の公式大会の会場にもなっています。また、多摩地域では、子どもたちのサッカーがとても盛んで、サッカーをする子どもたちがとても多いことから、元フットサル部キャプテンの卒業生で、現在はサッカーやフットサルのマネジメントを手掛ける株式会社ラボーナに所属されている堀田浩平さんからの提案もあり、多摩大学の地域貢献活動として「小学生フットサル大会」を開催しようということになりました。私たちは、フットサル部顧問の杉田先生の呼びかけで、子どもたちの元気な笑顔を後押しすることができるなら、と、スタッフとして参加することを決めました。

かつて、子どもたちの「フットサル教室」は、多摩大学で開催されたことがあります。大会は初めてということ。堀田さん、杉田先生を交えて、学生スタッフのミーティングを持ち、募集活動、準備活動、運営企画などについての計画を立て、実行していきました。開催日は12月11日と決定していて、学生への告知は9月にあり、そこで、私たちが応募して学生スタッフ（全5名）の構成が決まり、そこから具体的な準備作業がはじまりました。

小学生は、学年で体格差も大きいので、高学年と低学年の二つのカテゴリーで行うことに決定。また、コートサイズは当初、ハーフコートとしようと考えていましたが、最終的にはフルコートでやってもらうことにし、これについては、ほぼ正解だったと思います。今回の参加者はサッカーのクラブに入っている子ども達で、私たちが考えていたより、運動能力も技術もとても高かったからです。

審判やボールボーイ等の試合の進行は、現役の多摩大学フットサル部の選手全員が協力してくれました。

ワンデー大会ですが、1チームが少なくとも数試合、楽しんでもらえるようにしたい、と話していました。堀田さんが調べてくださった多摩地域の小学生のサッカークラブのリストをもとにした、各クラブの代表の方々へ連絡は杉田先生を中心におこなわれましたが、幸いなことに高学年、低学年ともに6チームずつの参加申し込みがあったので、

午前到低学年の大会、午後が高学年の大会と二つに大きく分け、それぞれに参加したチームが少なくとも4試合できるように試合を組み合わせることができました。

学生スタッフは、参加チームとメンバーのリストを作成、受付、案内、控室の準備、用具（ボールやホイッスル、ピブス、ゴール等）の準備、また大会の進行などほぼ全般を分担して担当しました。

試合は、低学年、高学年ともなかなかレベルの高い試合が続き、多少点差の離れたゲームもあったものの、各試合とも、とても白熱したものになりました。指導者や父兄がコートサイドで大きな声を上げて指示したり応援したりする姿も見られました。特に高学年の試合では、1点を争う緊迫した好ゲームもあり、スタッフも見入ってしまうものでした。女子だけのチームもあり、上位に食い込む健闘をみせていました。

それぞれの部の順位が決まった後、表彰式、閉会式を行いました。優勝チームや MVP には、株式会社ゴルージャパン様より、賞品を提供いただき、表彰式にて選手にお渡ししました。

また、指導者の方々からのリクエストもあり、試合終了後に、多摩大フットサル部対小学生のエキシビジョンが実現しました。大学トップクラスの選手とプレーすることで、子どもたちはとても楽しんでいられるように思われました。

今回の大会で良かったことは、まず、けが人が出なかったことです。目標でもある小学生たちがフットサルを楽しんでいたし、見ている保護者や自分たちも楽しめていたと感じました。大きな目的の一つは達成されたのではないかと思います。

終了後に実施したアンケートでは、子どもたちからも、保護者や指導者からも高い満足度が得られたことがわかりました。指導者の方からは、「次はいつ開催するのですか」と気の早い質問もありました。ただ、どのチームや選手も、サッカーを中心にした活動をしているため、フットサルに転向するような志向はあまり見られませんでした。

事後の振り返りの中で出された課題としては、①アップする場所の確保 ②多摩大フットサル部の選手達との打ち合わせ不足 ③時間を無駄にしない効率的な運営 ④保護者や各チームスタッフなどとのコミュニケーションが少なかった ⑤表彰式、閉会式での音響などがあげられました。また、低学年の子どもたちにとっては、コートがやや広いので、子どもたちの技術や体力、体格にあわせたコートやルール設定には改善の余地があるという意見もありました。

次回開催する機会があれば、ぜひまたスタッフとしてかわり、より深く企画や運営に関わり、地域に貢献するとともに自分たちの学びや成長にもつなげていきたいと考えています。



〈木村知義プロジェクトゼミ〉

メディア実践論の制作現場から

動画作品「“耳すま”散歩」を完成させて

経営情報学部 2年 奥原 れいな

プロジェクトゼミがスタートするとき、テーマについて、地域・大学・「私」の三つのジャンルが提示された。一緒に学ぶ友人と共同で作品作りに取り組むことをまず決めた。意見を出し合う中で、きれいな景色を撮りたいと思うのと同時に、私たちは多摩のことについて全く知らない、ということに気づいた。せっかく多摩の大学に通っているのだから、多摩市に関連することを撮ろうということになった。

私たちは共にジブリ作品が好きだった。話していくうち、図書館に原画が置かれている「耳をすませば」というアニメの舞台となっている場所に興味があることが一致した。大学最寄り駅の聖蹟桜ヶ丘に「その場所」があるが、私たちは実際に見たことはなかった。他の多摩大生も見たことがない人が大半だと思い、「その場所」に実際に立って、その風景を伝えたいという気持ちになった。

まずは下調べを行った。あらかじめ作品内容を細かく決めてから撮影に行くというのが基本らしいが、そもそも撮っていないものを想像してストーリーを考えるのにはとても苦勞し、時間がかかった。インタビューもしたかったため、人が集まるだろうと予想して「せいせき朝顔市」というイベントに合わせて行くことにした。

時間をかけて計画を練ったおかげか、当日は満足のいく撮影ができた。「せいせき朝顔市」では、貴重なお話を聞くこともできた。しかし、ここからがいよいよ制作の本番だった。撮影してきた沢山の動画の編集を、先生や先輩からソフトの操作方法を学びながら進めた。撮影前に組み立てていたストーリーの通りに作るのだから、すぐに出来上がるかな、と初めは思っていた。だが、現実はそのようではなかった。作業はなぜか全く進まなかった。

あらかじめ作っていた流れからは外れるが使いたい映像、ここだけはこだわりたい場所、など少しずつ「ズレ」が生じてきたためだった。このままでは作品にならないとわかり、私たちは撮ってきた映像をすべて見直し、もう一度ストーリーを考えることからやり直した。先生から「二人で一生懸命画面をにらんでいるけど、いまだどうなっているの…」と聞かれる。撮影する前に考えた構成から離れ、実際に現場で撮ってきた映像をもとに構成を組み立て直すのはなかなかの苦勞だった。でも、これが作品をつくるということだった。

映像に字幕も加え、どうにかうまく伝わるようにと何度も工夫を重ねた。仮に完成したものをゼミのみんなに見てもらったときには、とても恥ずかしい気持ちになった。だが、こういう機会を設けてもらったことで、なるほどと思うヒントを得ることができた。みんなからの意見をもとに、さらに良い作品にすることができた。

いろいろな部分にこだわって作ったからこそ、完成した時の嬉しさは大きかった。企画から完成まで長い時間をかけたため、本当にお疲れさまという気持ちでいっぱいだった。

この制作を通して、大学のある多摩について今までよりも知ることができた。そして、何度も何度も作りこんでいく編集作業によって、見た人たちに何かしらのメッセージを伝えられるような作品になったと思う。

私たちの作品が、多摩を知る一歩として、聖蹟桜ヶ丘を訪れる人が増えることにつながれば、本当にうれしい。



画面とにらめっこで編集集中：筆者左



現場でリサーチを始めたころは桜満開

3年間学んだ「メディア実践論」からの旅立ち

経営情報学部 4年 白石 一偉

私はプロジェクトゼミ「メディア実践論」に3年間所属し、学び、作品制作に取り組んだ。最初は自然をテーマに選んだ。多摩の四季はどれも魅力のあるものだった。しかし最後の年、対象を人に移した。今思うのはどちらも変わらず難しいということだ。

自然は、季節や天候、時間による光の強さ、色合いなど一瞬一瞬で異なる。初めは何気なく撮影していたが、五感を研ぎ澄ませると動物の鳴き声や水や風など、その瞬間にしかない「音」があることに気付いた。同じ風景はいつも目の前にあると思っていたが、全てその「一瞬の一回」しかチャンスのない、撮り直しのきかないものだった。人も同じで、その瞬間にしかない表情やしぐさ、語る言葉など、撮り直しは一切きかない。

ドキュメンタリーは「一回性」とのたたかい、予定調和をどう乗り越えていくのかだと教室で聞くことがあったが、実際に取り組んでみてそのことが理解できた。3年間を通して何を学んだかと聞かれたら、まず、「一回きりの瞬間の緊張感、そこに全力を尽くし挑む面白さ」と返すだろう。プロジェクトゼミに参加していなければ味わえなかったことだ。

テーマを自然から人に変えたのは、様々なことに挑戦する志の大切さに気付いたからだ。対象を変えることで色々な体験をすることができると思った。取り組んでみると想像していたものとはかなり違う作品になり戸惑い、落胆した。しかし、挑戦していくことで、自信が付きもっと多くのことに挑戦できると思うようになった。勇気のいることだが未知の体験にチャレンジすることで得るものはとても大きい。後輩の諸君には、視野を広く持ち、未知の難しさにぜひ挑戦してほしい。

私はこの春卒業し、社会へ旅立つ。幸いなことに早くに内定を得ることができたので、社会に出る前に何を学んでおくかが大事な選択となった。私は伝えることが苦手だったため「分かりやすく伝える」ということを課題にした。丁度そのころ先生から「後輩たちに教える役割を担ってプロジェクトゼミをリードしてほしい」と言われた。課題とマッチしたのだった。でも、いざとなると緊張して声が出なくなることもあった。人に伝える、話すというのは簡単なことではなかった。それでも回を重ねることで、何とか役割を果たせるようになったのではないかなと思う。何事も最初は上手くいかない。しかし挫けず挑戦することで、成長でき、自信につながることを学んだ。

最後に、木村先生はいつも「キャンパスを出る。社会に踏み出せ」と言い続けたが、このことが私も含めてなかなかできなかった。外に出ようとする学生、これが一番の課題だと思う。学期の始まりから企画を考えてと言われる。考えるがなかなか思い浮かばない。この企画を考え、組み立てるといふところにいい方法がないかと、今振り返れば思う。また映像を撮ってきても編集の技術がとても追いつかなく、表現しきれないもどかしさもあった。こうした私の「感想」がこれから続く皆さんの課題解決の道につながればと思う。

何度も失敗した。悔いの残ることも多くある。しかし学び得たことはもっと大きいと今では言える。3年間参加してきた「メディア実践論」で得たことを糧に、これからの道を力強く歩みたいと考えている。



カメラ操作をはじめ後輩の指導に熱弁



撮影はいつも一回きりの真闘勝負

学生会執行部主催クリスマスパーティー

学生会執行部 1年 渡邊 健史

前回のクリスマスツリーの記事に引き続きクリスマスイベントのご報告です。

冬休み直前の2016年12月23日T-Studio 2階にて、地域の小学生や幼稚園、保育園の子供たちを招いてクリスマスパーティーを開催いたしました。当日は、保護者の方17人、子供たち20人の計37人がご参加くださり、多摩大生と交流しました。

イベントは14:00にスタートし、日本伝統文化サークルのメンバーが紙芝居を読んでくれました。その後、ちぎり絵とクリスマスリース作りにプログラムが移ると子供たちは目を輝かせながら工作していました。保護者の方から「普段では見ることができない我が子が見られてよかった」とおっしゃっていただきました。最後、参加者の皆さんが工作しているとエレベーターからサンタさんとトナカイが登場！！サンタさん迫真の演技で子供たちの心をわしづかみにしました（笑）。保護者アンケートでも大変好評だったため、来年もクリスマスパーティーを企画しようと考えています。

ここからは企画者視点の感想です。今までのイベント主催のネックであった「ダラダラしてしまう」と「時間が押してしまう」ことをなくすため、企画発案の時点でこれを大きな目標としました。結果としてはどちらも達成しました！その分、当日はすごく忙しかったです（笑）。

次年度もこういった地域の方を対象とした季節のイベントを活発に行い、もっと多摩大学を知っていただきたいと思います。そしてもちろんイベントだけではなくサークルの活性化にも力を入れ、学生会が皆様の学生生活の支えとなるよう頑張ります。これからもよろしくお祈りします。



学生会の1年間を振り返り

平成28年度学生会執行部部長 2年 田倉 大雅

学生会の活動を通して、組織運営や組織の中で活動する事の難しさをより大きく感じる一年でした。私は、学生会の活動を一年からしていましたが、学生としての活力や組織の意識などを上手くコントロールすることがとても重要だと感じました。また、学生会のイベントを開催するにあたり、色々な準備もする中で成し遂げた達成感など、この組織に所属していなければ得ることができないと感じることも、とても多かったと思います。私は、学生会執行部部長をさせていただいておりましたが、自分の中で足りないものや既に持ち合わせているものを改めて実感することができたため、有意義な時間だったと今感じる事ができています。

これからも色々なことに直面していくと思いますが、この経験で失敗した事、自信を持てたものを糧に問題を解決して行こうと思います。今年度はとても早く過ぎていった一年間でした。一年間本当にありがとうございました。

新学生会部長&多摩祭委員長として・・・

平成29年度学生会執行部部長・多摩祭実行委員長 2年 玉木 真悟

前学生会執行部部長からバトンを受け取りました、多摩大学多摩キャンパス経営情報学部学生会執行部部長の玉木真悟です。今年度は多摩祭の委員長として大学に関わらせていただき、次年度は学生会の部長と多摩祭の委員長を兼任させていただくことになりました。

前回学生ジャーナルの場をおかりして、皆様にお礼を申しあげましたが、改めて2016年度の多摩祭を含め、多大なサポートをしていただき誠にありがとうございました。

学生会の主な活動は学内の学生活動の活性化で、特にサークルの活性化をすすめています。

ここ数年の学生会はサークルの管理があまりできておらず、新規サークルを応援することがなかなか難しく、活力のある学生をサポートする事ができていませんでした。そこで学生が大学生活を一生の思い出として、心に残るような場所を提供できるように、全力でサポートしていきたいです。学生会でできていなかったことを正常化させ、良い状態、最高の組織にし、後輩にバトンを渡し、多摩大学学生会の更なる発展につなげていける、そのスタートを切ることが、次年度の学生会部長としての私の務めだと思っています。

また、学生会は毎年イベントを数多く開催しており、春学期試験後のバーベキュー大会や地域の方が参加できるクリスマスイベント、留学生の歓迎会や送別会など1年を通し、大学や地域の方々と関わりを作っております。その関わりをさらに増やすために季節毎のイベントを増やせたら楽しいかなとも思っています。地域の清掃を兼ねた落ち葉拾いをして、その落ち葉で焼き芋などをし、季節毎に顔を変える多摩の丘陵を眺めつつ、大学生活を彩るのも良いのではないかと考えています。

4月を迎え、期待に胸膨らませた新一年生が多摩大学に入学してきます。新一年生が大学生活の中で自分の居場所を見つけ、楽しい大学生活をおくるお手伝いをできればと思っています。後輩学生を新たに迎える先輩学生ひとりひとりのご協力もお願いしたいと思います。

最後になりますが、学生会だけではなく多摩祭も前年度以上に盛り上げていきたいと思っています。ご協力よろしくお祈りいたします！



新学生会での長野スキー合宿